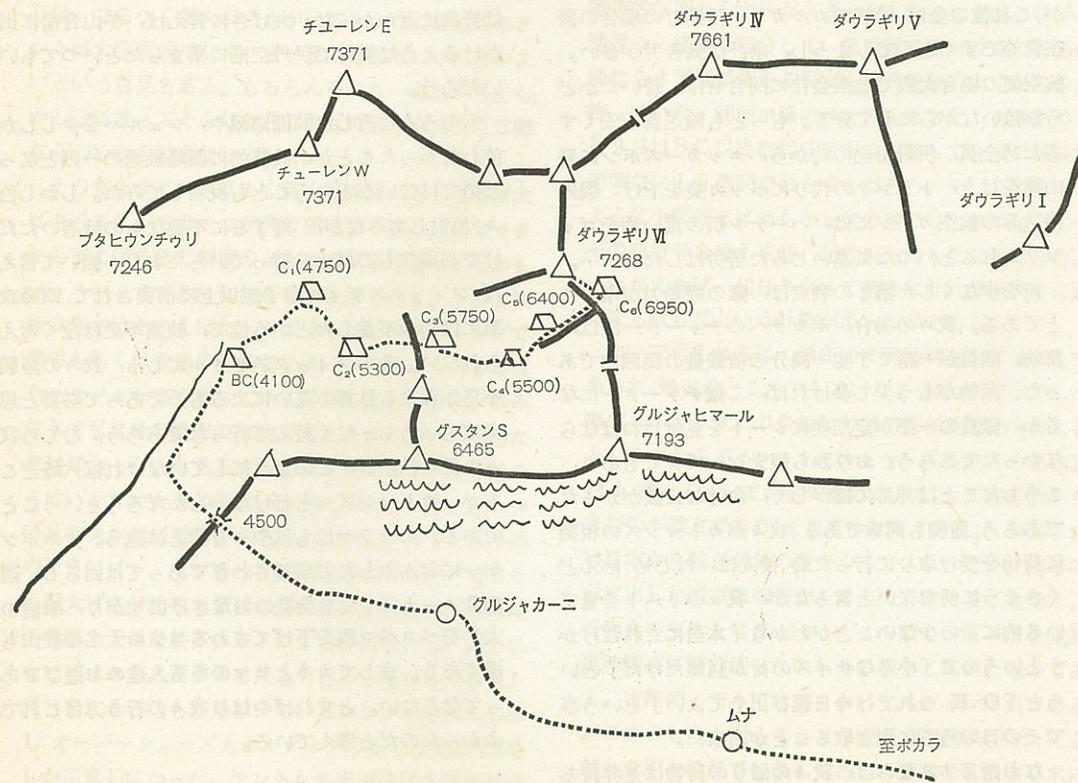


# 南極雑感

—南極観測隊と探検—

上 田 豊

西ダウラギリ概念図



## 1 内陸調査旅行

1969年2月15日、極点旅行隊は141日間、5200kmのトラバースを終えて昭和基地に帰投した。私たち新参の10次隊は、彼らの感激ぶりを近くでボヤーとしてながめていた。

私もいちど極点旅行隊への参加を希望したことがあった。しかし彼らをむかえても、何か他人事のような気がした。それは、ひとつの時代が終わったのであり、次の時代がはじまろうとしており、自分たちは次の時代のトップバッターであるという観念からきたものであろう。

極点旅行は、いつかはやらねばならない計画である。それは早いほどよかった。そしてアメリカ隊の燃料サポートを得たが、とにかく成功した。昭和基地から長い一本の線を極点まで結んだ。観測面ではその成果はまだ評価できないが、多くの知識をもたらすはずのものである。設営面でも快適なKD60型雪上車を開発し、それが長途の旅にたえうることを実証するなどの成果をあげた。それらは今後の内陸調査旅行に光明をなげかけるものである。

日本隊の過去の大きな内陸旅行は、3次、4次、5次、8次隊がおこなった。3次と5次は村山氏、4次と8次は鳥居氏が越冬隊長と旅行隊長をつとめた。それらの旅行隊の成り立ちの大勢は、ボスが手下をひきつけてといった感じのものであったといえるのではないかと。そして9次隊の極点旅行は、それまでの内陸旅行の総決算ともいべき村山学校の修学旅行といった感じのものであった。修学旅行は小・中・高校とあるが、そこからは何のフィロソフィーも残らないのが常である。

極点旅行によって、過去の日本隊がとってきた旅行隊の成立様式やその構成メンバーの終末をむかえ、あとには物とそれらの経験で得られた情報だけが残った。私たちは残されたものをふまえて日本隊の内陸調査の将来像をかたちづくる新たなスタートをきらねばならない。人間の代謝が一度におこったのだ。それはそれでさっぱりしていいことだ。

私は10次隊に地学部門の雪氷学担当の観測隊員とし

て参加した。10次隊の地学部門5名の最大の目的は、南緯72度線にそってやまと山脈にいたる2000km、90日の内陸調査旅行である。これはエンダービーランド地域雪氷学的長期調査計画といわれるものの初年度にあたる計画である。この計画は、日本に閉じこもって雪をいじくるといった感じの日本の雪氷学界に欲求不満をもった若手研究者の有志が集まり立案した研究プロジェクトである。エンダービーランドの水収支の機構をあきらかにするため、10次、11次隊により内陸調査をおこない、それぞれのルートで4年後の14次、15次隊によって前の隊がセットした標識ポールなどの再測をして、積雪量や氷床の流動速度、氷床の厚さなどを知ろうとする、データ整理をいれて10年の計画である。

こういう成り立ちと継続性をもった計画は、日本の南極観測でははじめてであるし、日本の雪氷学界でははじめてのことである。それがうまくゆくかどうかは最初にかかっているといつてよい。計画を軌道にのせるためには、当面の課題は測量のしろうとが、南緯72度線にそって250kmにわたる三角測量網をかなりの精度でやまと山脈の不動点までもついでにかどうかという点にあった。それはやってみなければわからない。はじめてのことをやる場合、試行錯誤はつきものである。実施方法は越冬がはじまってからも、現場あわせによりたびたび変更された。まずトラバースの運行方式から変えてゆかねばならなかった。そこに、はじめてのことをやる時の人間の限界が感じられるが、そこがまたおもしろいところであった。

11月1日昭和基地を10名の隊員で出発し、8次、9次隊のたどったルートを南下して、11月21日南緯72度に到着した。そこからルートを西にむけ、測量をしながら1日10キロから15キロの歩くよりおそいペースで進んだ。適当な測量点をつみつけるため雪上車でウロウロするので、最初の頃は1日10キロ未満しか進まず、当初の予定の放棄にせまられることもあった。測量網は、やまと山脈のヌナタク頂上で秒速30m近い風に面と向かった測量を最後に、ほったの凍傷をありがたくちようだいして完成した。1ヶ月の予定が10日おくれた、おおみそかの日だった。

北大で1次隊のソリ旅行用の樺太犬の訓練をしていた安藤旅行隊長は、西堀さんが「南極越冬記」でボツンヌーテン旅行隊の帰着をむかえて、まっさきにボツンヌーテンの「天測やったか」とたずねた部分をひき、越冬隊員に今までの旅行と私たちの旅行の性格の変化を説明した。今までは、ある地点に到達することが目的であり、その地理をあきらかにすることに価値があった。また、どこまで行くことができるかが問題であった。これからは、旅行のルート上で何がなされたかが問われることになるだろう。

## 2 やまと山脈登山

やまと山脈は南北50kmの間にAからGまでの7つの山塊にわかれている。標高はすべて2500m未満で、大陸氷床からの比高はいずれも500m足らずである。南極の登山は南極の最高峰ビンソンマシッフのアメリカ登山隊でもわかるように、山岳地帯までのアプローチさえできればあとは取付きまでマイカーでゆき、たくさんのピークに短期間に登ることができるという楽しさがある。いわゆるピークハントにはうってつけのところである。私は全部のピークに登るつもりだった。とりわけG群のピークはすべて未登で、高度不明のためどれが最高峰かも定かでない。

予定がおくれたため、残念ながらやまと山脈はかけ足で通過することになった。山脈の南部はなだらかな山容を拡大なモレーンフィールドが見事な流線できりまき、北部の山塊は青氷の氷原に氷河をいだいた岩峰が殿堂のごとくによっきりとそびえたっている。ここを最初におとすれた4次隊がうらやましい。彼らはG峰を残してすべてのピークを登ってしまった。私たちは、正月にやまと山脈最高点のA群頂上に全員で登った。私はB群、C群は調査優先であきらめ、E群頂上とE群で2番目に高いピークに仕事のあいまをぬすんで一人で登った。わずか2時間ぐらいの登山であったが、急斜面にアイゼンを快調にこまかせて登っていると、山登りを知っていることのしあわせをつくづくと感じた。

E群頂上からG群を観察すると最高峰はどうやら一番西寄りのピークらしい。ここから見ると、ジャヌーの西面を何分の一かに縮小して雪を落した感じの格好で、頂上はピンととがり、G群でも一番むつかしそうな岩峰だ。テーヤン(泰安)が仲人だったという学習院山岳部O. B. の八木さんと一日かけて登りにいった。自信満々勇んでかけたのはよかったが、ルート偵察で一日つぶれてしまった。私の好みからいうと、西面の、G峰でただ一ヶ所雪のついた急峻な小ルンゼから肩に出て、バンドづたいの岩登りでピークに立つルートが最も良いと思ったが、そのルートは最後に登り口

までしかゆく時間がなかった。G峰の岩壁はちよつと取りついてみたが、全体に逆層気味で、ハーケンに適当なリスが少ない。立派だがあいそのない山である。とにかく登頂には、ボルト、ハーケン、アプミをガチャガチャいわせ、ビバーク覚悟で臨む必要があるだろう。そんな用意はないし、この山を登るには一年ほどみつちり高度の岩登りのトレーニングをやってからの方がよさそうだ。

やまと山脈にはこのG峰をはじめとして、未登の衛星峰やスナタークはたくさんある。またクライマーの登高欲をそそる岩壁にもことかかないが、氷河にみがかれたほとんど垂直のツルツルの壁で、人工登攀の連続となるだろう。それらの登攀は調査旅行のついでにというにはちよつとしんどいし、かといってそのための登山隊を日本または昭和基地から派遣するのは大げさである。しかし将来は、観光旅行で昭和基地を訪れた金もちクライマーが飛行機チャーターまたは定期観光フライトによってやまと山脈に着陸し、登山するといった時代がくるかもしれない。

D群の福島岳は、やまと山脈で最も大きく堂々としている。自信のない人は途中で待とつたらええやという安藤さんの甘言にのせられて、パーティは山になじみのうすい人も含めて7人の大所帯となった。ルートは4次隊の岩登りのある初登ルートよりやさしいとみて、南面西よりの雪のガリーをとった。結構急で、ちよつと岩のでている所でフィックスを一本たらしめた。アイゼンに慣れない隊員には、すぐうしろに山慣れた隊員がくっつくようにしておしあげ、とにかくみんな頂上に立った。登ったはいいが、みんなが無事に降りるのは少々やっかいだった。下降はふきつける強風の中、フィックスのつるべでなんとか安全な所にたどりついた。あとは下に白夜の圏谷氷河をみながら、あまりすべらないシリセードで、やまと山脈での12日間の行動を終えた。

## 3 南極観測隊と探検

### 3-1 まぼろしの山脈

内陸旅行の往路は、8次と9次隊がとった東経43度線に沿ったルートを南下した。私たちが9月のデポ旅行ですでに通ったことのある道だった。昭和基地南東150kmにあるF100付近は、ルートの東に氷丘が続いていた。帰路は余裕があれば往路より東よりのルートをとる予定もあったので、天測をしないナビゲーターとして先導の任にあった私は、双眼鏡でじっくりと東方のスカイラインをたどっていた。白一色の雪景色のところどころに、曇天のため青氷がにぶいかげりをみせている。

やがて双眼鏡の視野をぼんやりとした褐色のシミの

ようなものがチラッとかすめた。ドキッとした。目標を褐色のものにあわせてじっと見つめていると、だんだんとはつきり見えてきた。岩石にちがいない。この付近でかってそのようなものがあつた報告はない。だんだん興奮してきた。露岩なら、最近の日本隊では大発見だ。かってオーストラリアのパイロットが、昭和基地南東約400km付近に山脈をちらっと見たことを報告してA. N. A. R. E. 山脈とよばれたが、3次の村山隊が踏査した結果その存在が否定され、まぼろしの山脈とよばれるようになったという話がある。

もしその褐色のものが露岩なら、その付近の氷丘の存在からして、まぼろしの山脈がその背後にかくれていても不思議はない。山脈がなくても、こんな所に露岩という不動点があれば、いろんな調査をするのにひじょうに好都合なのだ。私は凝視した。だが残念かな、どうやらモレーンのようである。ひよつとしたら単なる影かもしれない。そこまでどれぐらいの距離があるのかは、雪原上ではちよつと見当がつかない。今すぐ見にいこうという隊員もあつたが、安藤さんは帰路に調査すると断をくだした。

やまと山脈にいるところ、11次隊をのせた「ふじ」は昭和基地に接岸した。ラサという飛行機も持ってきた。早速安藤さんは、往路にみつけたF100のモレーンらしいものの付近を飛んでみてくれという内容の電報を打った。たとえモレーンであっても、モレーンの存在、氷丘とクレバス帯の存在、やまと山脈付近と同様に雪がなくて氷が露出している様子などから、何かありそうである。かって報告されたANARE山脈の位置からはかなりはなれているし、ソ連の飛行機もそのあたりを飛んだことがある。しかしこのF100付近をめざして、露岩発見のために飛んだのではあるまい。客観的にみれば万にひとつの可能性かもしれないが、飛んでみる価値はあるのではないか。

やまと山脈からの帰路、私たち3人は往路と同じルートからはなれ、F100モレーンの調査にむかった。モレーンはあつた。発見にはちがいがいが、単なるモレーンでしかなかった。F100から16km東方にあり、長径500m、短径200mの楕円形をしていた。南の方にも2ヶの小さいモレーンが見える。このあたり一帯が氷床の中にとりこまれたモレーンのわきだし口になっているのだろう。モレーンの東方は急斜面のクレバス帯をつらねた氷丘脈を形成していた。氷丘の上まで行くには基地崩投日敵守という制約と、ガソリンの不足、クレバスという障害があつたので、ラサに望みを託して引返した。昭和基地帰還後、雪上車を撤収する私たちの頭上をラサは自衛隊のヘリコプターと、何のためか知らないが晴れがましく編隊飛行をおこなった。それは飛行場の撤収日だった。

ラサは飛ばなかった。やまと山脈への飛行と、当初の予定の海岸線の航空写真測量をやつて燃料をつかいはたした。予定の航空写真測量というのは、すでにできている地図の精度をあげるためのものである。たしかに現在でも海岸部の地図に誤りを指摘することはできる。しかし精度をあげる以前にやるべきことはまだあるといつてよい。南極の地理的探検は、航空機によって飛躍的な進展をとげたのではなかったか。もう飛行機はそのパイオニア的使命から、みずから引退してしまつたのか。

南極が観測の時代だといわれるようになると、探検的なおもしろい課題がみつかつてもすぐに頭の切りかえのできない固さがみられる。予定がいっぱいでがんじがらめなのだ。それは観測という性格のもつ大きな特徴である。物質的な余裕はあるのだが、無駄も多いので時間的精神的にはギリギリの精一杯の状態にあるのが観測の一般的な姿である。探検というものは物質的には最小の規模で最大の成果をあげようとするものである。何かあるかわからないことを調査するのが探検であるから、状況に応じて臨機応変の処置をとるために、時間的な余裕と頭の柔軟性は不可欠のものである。そして通常、地域調査というものは、探検が観測に先行する。

南極エクスペディションは観測か探検かという古い論議を今になってここでむしかえす気は毛頭ない。けれども、より詳細な精度のいい知識を得る観測も必要であるが、常にまったく新しい事実を求めてうけいれるスペースを残しておくことが忘れられてはならないのは、南極にかぎったことではあるまい。ここでなにもオーロラ屋さんに本業を犠牲にして地理的発見をしろというようなたぐいのことを言っているのではない。地理屋なら地理屋で自分の専門についての心がまえを言っているのであつて、隊としては、組織のリーダーシップをとるものが、オールラウンドなアマチュア精神を保持すべきなのだ。

### 3-2 発見といふこと

探検の目的とその成果は発見という言葉で表わすことができるだろう。地理的発見をする行為を探検、発見をする行為を広義の探検と定義することもできる。

私たちはやまと山脈の近くで、青氷の上に載っている黒い小石を全部で10ヶ発見した。帰国後の検査の結果隕石であることが判明した。南極全体では1965年頃までに回収された隕石は4件、6個しかない。ただし1ヶの重量は従来のもより1ヶタ小さい。また私たちはF100近くのモレーンの他に、やまと山脈付近では地図にないスナタークを見つけた。10月に白瀬氷河に調査旅行した際、地図にないスナタークらしいものを望見した。また11次隊のパイロットは地図にのって

ない島を発見した。

これらをもって私たちの南極観測が立派な探検であったなどと宣伝するつもりはない。隕石の発見のたぐいはビルの屋上でもできるし、他の話もひとむかしまえの地理的発見にくらべると、ずい分みみちい話だからである。しかし見おとされてならないことは、私たちが初トレースした南緯72度線は、たかだか250kmにすぎないが、何もなかったということである。ただし、何もなかったということを見発見というためには、水ももらさぬ完璧さが要求される。また、全く同じ状況のもとでも発見できる人とできない人がある。せっかく発見しても、それが発見者個人の中で埋没してしまえば、それは発見でなくなってしまう。いままであげた発見も、小さいものであるだけに、そういう埋没していたものの掘りおこしであることもあるだろう。特にそういう埋没は、南極観測隊ではおこりやすいことだ。したがって発見を見発見とするためには、すなわち探検するためには、それなりの意識と知性が要求される。

探検のセンスをみずから放棄することによって、南極観測は発見の機会と南極のおもしろさに目をつぶっている面があるのではないか。また、発見ということにこだわらなくても、あさはかな人知で立てられた最初の予定以外のおもしろい仕事を見つけるということは、大切なことである。それがなければ南極の将来には、情性しか残らない。

帰国の途についた船上で、安藤さんの内陸旅行の報告があった。彼は、予定の仕事はほぼ満足に成されたが、プラスアルファが不満足なものだったので旅行隊の成果を減点した。ある隊員から、どうして予定どおりの仕事ができただけなのに減点するのかわからないという質問があった。プラスアルファの意味は、説明しても結局理解されなかった。

### 3-3 エクスペディションの目的と今後の組織

日本南極観測隊の目的は何か。普通一般のエクスペディションは、ちがった役目をもったその構成員が一致団結する共通の目的が明確であるといえるだろう。日本南極観測隊では各部門、各個人の目的はかなり明確だろうが、共通の目的は不明確きわまりない。お題目はいくらでもとなえられるが、ひとたび具体的な目的が明確にされれば、それは一致団結よりもむしろおたがいの衝突を生む場合が多い。これは大世帯のお役所的総合研究所といったものに似た状態といえるのではないか。昭和基地は文部省の理想通りの姿に近づいているといつてよい。

私たちが内陸旅行最大の課題である、南緯72度線にそった三角測量網を組みはじめた当初、設営陣からかなりの不満がでた。行程がのろい、雪上車に負担が

る、燃料をむやみに食う、自分の仕事があるのにやっかいな観測の手つだいをぶっつけ本番でやらされるなど。これは観測陣の不幸からくる設営陣の不信感のあらわれともいえる。しかし南極観測では仕事の専門化にともない、異質のバックグラウンドをもったものが隊を構成するようになったため、共通の目的のために結束することがむずかしい事がある程度ものがたっている。この場合、設営陣をなじっても問題は解決できない。むしろ、観測陣の認識と配慮の不足を反省しなければいけない。この問題は結局、仕事が軌道にのり、行程がスムーズにはかどるようになって、自然に解消されてきた。

昭和基地では各隊員がみずからおたがいの立場を尊重し、わるくいえば丸くおさまっていたため、横の関係はひじょうに円滑であった。そこでは何の非常事態もおこらなかつたため、強力なリーダーシップは不必要であったし、歓迎されなかつた。そんなものより、良きマネージャーが居てくれれば、それで十分だったのである。これは10次隊のひとつの特徴であり、おたがいの一致した意見であった。実質的には、横のつながりだけで成り立っていたといえる。

一般的にいつて今後のエクスペディション、主に学術調査隊といったものは、従来の山のリーダーシップとはちがったものが要求されてきているといえるだろう。メンバーは登山パーティのセンスもなく、おたがいの気心を知らないよりあい所帯になることが多いだろう。そういう隊で一言のもとに隊員を納得させ、全体を右に左にと動かすことは至難のわざとなってくるだろう。ここでは経験やカンよりも、各隊員のさまざまなことになった、あるいは的はずれの意見にこたえ、全員を理路整然とした言葉によって納得させる論理性が要求されるだろう。また、へたなリーダーシップは敬遠され、無視され、仕事で疲れた隊員の生活を楽しくくつろいだものにし、気心の知れない隊員間の心のしこりを取除いてくれるようなホスト的、潤滑油の隊長が歓迎され、あるいは単なる象徴としてのリーダーが多くなるだろう。

また従来の私的エクスペディションによくあるプロモーター的な、隊を実質的にとりしきっている隊員は、隊の成立過程が変化することにより、あまり見られなくなるのではないか。このことは強力なリーダーシップのそう失と、隊員の混成化がすすむことによる先輩後輩関係の無力化とあいまって、隊の縦の系列をくずしてゆくだろう。これらのリーダーシップや隊の組織の変化から、エクスペディションの構造が、日本で一般にいわれている民主主義なるものに近い傾向をもつことになると思う。いや、もうとくに、はじまっている事ともいえる。それがニセか本物か、良いか悪いか

は別として、機に即してじん速に対処し、全員一丸となって事にあたるといった事には不便なことだろう。そういう必要はなくなってきたということだろうか。

## 4 おわりに

南極は結構おもしろかった。日帰りを除くと延べ約5ヶ月の基地外行動をおこなった。いいふるされた言葉であるが、南極観測がいく度くりかえされようとも、南極の自然は昔も今もかわりない。8月のオメガ岬への海氷上の調査旅行は、巨大な氷山群に感嘆し、氷づめになったデコボコの浮氷群に難渋した。10月の白瀬氷河への調査旅行では、海氷のプレッシャーリッジやリードに行手をはばまれ、ルートをもとめて走りまわった。白瀬氷河は壮絶な景観だった。内陸旅行では、やまと山脈や、白瀬氷河の源頭と考えられている南緯71度線のクレバス帯で、ひどく神経をすりへらした。しかし極点旅行用に開発され大型でクレバス帯に不適とされたKD60型雪上車が、クレバス帯でも小型雪上車の誘導さえあれば立派に行動できることを実証できた。やまと山脈や海岸部の氷河歩きも、緊張すると同時に楽しかった。これらのことは、登山の最中に感じるような緊張感と、登山後のあのいいような安ど感と満足感に似たものを与えてくれた。またなによりも貴重なことは、それらの野外活動によって、若干の地球科学的イメージを得られたことである。

人跡未踏もしくは未開の地というものは、一般にまず英雄的な探検家が道をひらき、その後文明の進展にともなってアプローチが急速に容易となる。それが大衆的私的エクスペディションのさそい水となる。南極もアプローチの困難さもあって、IGY以後の国際組織、国家組織による独占時代という特殊事情はあるが、一応その例外ではない。将来南極では観光開発が進むとともに、それが現代的な意味での私的エクスペディションを生むかもしれない。そして大陸の要所要所にヨーロッパアルプスの山小屋的な意味をもった公用基地が建設され、南極大陸全体がアドベンチャーや探検の巨大なオリンピックスタジアムのようなものかもしれない。そのためのフィールドは、南極エクスペディションが長い間学術観測に専念しているため、意外と残されているのではないだろうか。

日本隊では11次隊によって仮の内陸基地が設置された。航空機の越冬も近いうちに実現するだろう。今後の内陸調査は、内陸基地での観測とともに、内陸基地や極点旅行の経験を利用して、より広い地域の基礎的な知識をもたらすだろう。あるいは特定のテーマをもって、せまい地域をくわしく調査する方向にむかうかもしれない。内陸ばかりに目をうばわれずに、海岸部で忘れられた調査をがっちりやるといふきかたもあるだろう。地域調査というものは、線から面の調査に移行してゆくと考えられるが、そこには航空機などの機械力の利用とあいまって、調査方法の質的な発展的転換が必要であろう。

南極にいきたいというだけなら、1度いけばいいだろう。南極で何かをやりたいのなら、1度だけでやるほど南極は小さくはない。南極を自分のものとして長つづきさせるためには、なんらかの課題を南極にみいだすことである。それはもちろんオリジナルなものほどいいわけである。南極の英雄時代以来、世界各国の南極エクスペディションで得られた成果は多い。しかし得られた成果が多いからといって、オリジナリティのある行為の可能性があまり残されていないということには、対象が大きい場合必ずしもむすびつかない。

南極に行かない一部の人は言うだろう。「南極なんて日の丸遠征はおもしろくない。」しかし、越冬生活にも体制内自由はあったといつてよい。とにかく越冬がはじまってしまえば、肩書きは公務員でもそんなこと知ったことではない。自由は本人がその気になれば、1年の期限つきでなんとでもなる。

またある人たちは言うだろう。「もう南極観測も軌道にのってしまつておもしろくない。」なるほど1次隊はおもしろかつたと思う。何事も常に最初がもっとも偉大である。しかし別の最初もなきにしもあらずである。落穂ひろいといわれようが、そこで理念にしたがつて華麗なる転身をするという能のない、南極という自然の好きな者にとっては、なにもしないよりかはずっとましなのである。私たちが現に日本の山で、開発された登山道はずし、何かをもとめて山登りを続けているのではないか。南極よりおもしろいことはある。しかし日本にいるよりはましな一年間であった。